

氏 名	Aligül Ayverdi アリギュル アイベルディ
学位の種類	工 学 博 士
学位記番号	論 工 博 第 2 6 号
学位授与の日付	昭 和 39 年 6 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	AN APPROACH TO -ESPECIALLY- THE INTERIOR SPACE OF THE ARCHITECTURE OF JAPAN (日本の建築の空間—特に内部空間—へのアプローチ)

論文調査委員 (主 査)
教 授 増 田 友 也 教 授 福 山 敏 男 教 授 西 山 卯 三

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の主文は、3部からなり第1, 3部はそれぞれ序説と結論とであり展開 (development) と題された第2部が日本の伝統的建築—特に住宅建築— (以下単に日本建築と呼ぶ) における空間的形成の諸相について、6章に分けて論旨を展開している。

まず序説において日本建築に過去の西洋美学の直接的適用の不適當なことを述べ、日本建築は、その空間的特性で捉えなければならぬことを主張している。その理由は本文の以下の分析的研究で明らかにされる。そうして、その研究のために今日の建築史、民家研究の諸資料が博搜されている。

第2部空間の展開では、空間をまず相関関係であると定義している。その相関関係とは、言うまでもなく実体的な空間知覚に関する指定であって、それは事物のみならず時間や光や寸法その他をも空間知覚構成の要素と見ようとする。このような定義のもとに日本建築の顕著な空間的特性を空間そのものの構成として或は空間的特質として、分析の実証的に研究している。

第1章においては、空間の一時性について述べている。この一時性とは基本的には日本人の心性によるものであって著者によれば単に空間のみならず建築や都市の一時性とも関連するものであって、奈良朝以前の遷都やその原因と見なされる浄、不浄観や中世思想の火宅や或いは日本語における家屋に関する名詞の地位表現例えば、殿や門などの用語例を列举している。この要素的な日本の心性を建築においては構造と機能、ひいては、空間のそれぞれの一時性に見ることができるとする。

即ち構造においてはそれが木造であることによって石造建築などに較べ仮設的にならざるを得ない。のみならずその継手や仕口に補強金物を使用しないことによって、この仮設性は一層顕著に日本的なものとなる。日本の地震や台風のはげしさにかかわらず玉石基礎のごときもまた構造における仮設的性格を示すものと言えよう。

機能における一時性とは典型的には各室の用途に見られるところであって、室の転用性と言われるものがそれである。一般的に建築において特に日本建築においては、機能とは、事物的生理的機能と心理的、

精神的機能とがあり、室の転用性のごときも、この両機能に应ずるものであることに注目しなければならぬ。即ち、この場合襖による内仕切りは、用途に応じて室の大きさの変化をあたえるとともにその空間的特性をも変えて行くものである。

このような観点から、また例えば底のごときものも語源的発生的には直射光を遮るものであるが、しかしそれは後には周知のように、日本住宅の平面形成に重要な契機となって、遂には、日本の内部空間を底的付加的特質をもつものとして本質的に変貌させて行くのである。

また、所謂寝殿造や書院造においては、畳、几帳、屏風などの一時的配置によって障子、襖の任意の開閉によって、或は、床の間の装飾の取り替え、簾、障子の季節的取り替えによってその内部の両機能に關していよいよ一時性を顕著にするのである。

第2章において著者はまた日本建築の空間自覚について述べている。

まず、日本人の自然への参与について記し日本人の空間的な開放的欲求の根源をこの自然における開放感と関連せしめている。そうしてそれは、日本の空気の多湿性の生理的、心理的反応であろうと考えている。

まずそう言う原始的な開放的な空間感情が先在して、そこに例えば平安末期の極楽浄土の造型的表現のごときものも可能になるのであろうとしている。即ち、平等院の場合には、明らかにそれは所謂浄土曼陀羅の建築化にはかならぬがそこには細部的なもの、内部的なものの絵画的関連化 (relativation) が見られる。

さらに巖島神社においては、その開放性は顕著であり、それが明らかに空間的開放性として自覚されているとする。このことは、その空間の統一的全体性、四方的拡がり及びそれにも拘らず強い軸性の設定などに見られる。しかもこれらの空間的特性は、自然的地形や、海面の上下などによって、一時的変化的なものとして実現されている。即ち、空間は、一言で言えば季節や時刻と共に変化する景観として把握され建物が言わば景観化されているのである。そうしてこのような驚くべき空間的達成が可能となるのはこの建物が非効用的宗教建築であったからにはかならぬとする。

第3章において著者は looking-down culture なる用語を用いて日本の空間構成を解析しようとする。looking-down とは補論において詳しく論じているが、それによると日本の風土が例えば Arabian Desert などに較べて甚だ季節的変化の豊富な風景をもつところから天文学や代数や、幾何学的関心よりも、地上の景観、四季の変化への関心が甚だ強く、自然にその視線が地面に投げられるように条件づけられたのであろうと言う。このことが基礎にあつて座式生活において視線の流れは内部の天井から底の天井を伝って下向し、軒先から庭園に移って行くように制限される。このことが日本の内部空間と庭園とを結びつける一つの心理的根拠となっているのである。そうして日本人は天上の月でさえも甚だししば池の水面に映るものとして観賞するのである。

これらの結果として、天井は木造のものとして、もっとも単純な棹縁天井を完成しそれを伝統としたのである。それは殆んど無視することが出来る程単純、平板なものであった。さらに言えば天井のこのような単純さがあったからこそ、後に小さな茶室において、あの劇的な変化的な天井の形成が一層強い意味をもって来るのである。また、床面についてもその審美的関心は西欧と対立的である。殆んど放置されたま

まである西欧の床面に対して日本人はそこにある種の秩序を与え、その秩序を一層純化するために、そこに家具類をおくことを拒否するのである。

これらは悉く、日本人の建築における下方への関心であると言えよう。しかもこの下方への関心は同時に精神的な内部への関心でもあることを指摘している。そうしてこう言う論理的経過から日本建築の内部は事物的、生理的にもまた心理的、精神的にも多様の特性を帯びてくるのである。まずその第一は閉鎖性であるが、日本の内部空間の閉鎖性とは、前述の開放性と表裏の関係にあって、言わばそれは半閉鎖性又は半開放性とも言うべきものである。この半開放性は主として、建具の特性によるものであって、それは第一にはまり機構 (sliding mechanism) により第2に紙障子の場合その紙の性質による。開口に嵌められた襖や障子はその全開口を通常同時には開放せしめない。(それはしかし全開口を開放する可能性をもっている。紙はさらにその遮断、もしくは透過に関して選択的である。それ故に例えば、紙障子の場合、それは内部と外部とを完全に開放することから不十分に隔離することまでのあらゆる開放度を許容する。これらの結果として室の閉鎖性は甚だ不安定なものとなり、言わば外部の内部への誘い、内部の外部への拡散が日本建築の空間に決定的な特性をなすにいたるのである。このような比類なき日本的空間構成を著者は int-exterior space と名付けている。

次いで、著者は内部空間の自然化を挙げるのであるが、この自然化は建築材料の天然素材であることとその加工の手工芸的であることのみならず室の壁面が極度に小面積であることから内部から外部自然への連関が一層重要なものとなることを指摘している。しかも集約的に纏められた壁面である床の間においてさえその装飾一画軸や生花において自然化への傾向を顕著にすることを述べる。のみならず、仕上材料の色、匂い、光の吸収性等に関しても自然への assimilation が見られる点をも挙げている。

これらの内部の自然化はしかし畳の敷詰めによってむしろその表現性は或る程度抑制される。即ち畳の組合せによって出来る抽象的 pattern は後に述べるように空間の中性化の傾向をもつものであるが、しかしその抽象性は、この自然化された空間の故に、非人間化されることを防止しているのである。

第四章は象徴としての空間について述べている。

上述のような開放的な空間感情を根拠としてその上に形成された内部の一時的、変化的自然化、即ち真に自然的であることへの関心と言うことから日本人は空間を自然において、自然らしさ (naturalness) において実感する。この実感的な自然らしさとは言いかえれば、日本の内部空間における象徴的意味であると言うことができる。内部とは、その象徴において自然なのである。この象徴はしかし前述の浄土世界の象徴とは、自ら別なものであることは言うまでもない。

そうしてそれが象徴的自然であると言うその自然もまた言うまでもなく、日本の風土的自然であって、それは自然に対する既に伝統化された特殊な態度 (trainedness) に拠るものである。即ちそれは自然に対して西洋的な抵抗的なものではなく甚だ東洋的受容的なものであってその結果自然はその荒々しさにおいてではなく、その柔和さにおいて把握されているのである。このような受容的、親和的自然は内部の自然化に際し前に触れた中性化の傾向を帯びてくるものである。この中性化は光においては深い庇 translucent な紙障子とその機構的特性などによって、減光された内部は一様な低い照度をもち、また平面や壁面の天然材料の使用によって弱化された抽象的構図によって中性的なしかも甚だ親和的な内部空間をつくりあげ

ている。またそれは単に colloidal な中性的であるのみならず、部分においてその質と質の濃度を変えている。hodological な空間を現象せしめている。そうしてその hodological な空間が床の間や出入口や、方位などによって甚だ articulate された空間構造を持つのである。

この hodological であり構造的でもあるに拘らず内部空間は同時に統一された全体でもある。しかもこの統一は内部のみならず内部と外部—この外部も外部自然そのものでなく、人工された外部、即ち庭園である—との統一である。自然は既に親和化された自然であり、その自然を人工的に表現した庭園である故にここにはも早嚴重的内部と外部との対立は存在しないのである。それ故に、内部と外部との統一的全体化が容易に、且つ完全に行なわれているのである。

底はそれ故この場合、甚だ親和的な transition を形成する。

著者によれば、ここにおいて int-exterior space と ext-interior space が融合するのである。著者はここでお玄関の空間的機能について、略同様な理論を展開しているのである。

第5章において著者は、空間表現を形の機能として促えその形の日本の特性について述べている。まず上記の空間的特質を総括してしかるのちにその形の非相称性を挙げているのである。

日本の造型の一特質である非相称性は日本人の風景観—風景的空間知覚—によるものであり、さらにそれが日本的書法によって訓練されたものであることを指摘する。

次いで、著者は建築とは或る意味では機能に scale と size とを与えることにほかならぬと主張し、日本建築では、しかしこれらの size は何時も自然化を通じて Humanize されているものであることを述べている。ここにおいて日本建築の size は言わば Human-size scaled と言うべきものであるとする。また空間の全体化は、例えば、中世の御飾書のごとく床の間や細部における全体的調和的統一の伝統によるものであるがこの場合にもその非相称性は明らかである。またこの全体は、も早付加することを許されぬものではあるが、しかし省略は象徴的手法によってここから始まるのであるとする。

第6章で著者は日本の外部空間一般について前述のような過渡的 (transitional) 空間論を展開している。

そうして最後に建築が自然なり、風景なりに適合するという言葉の意味をこの過渡的空間の概念によって説明し、日本の現代建築のある意味での伝統喪失を批判している。

最後に結論において著者はこれまで述べてきた経験的実感的な日本の建築的空間をこれらの総合的特性によってそれを超越的空間と名付けている。この分類は言うまでもなく、経験的現象をはなれた論理的設定であって、この経験からの超越をその中性的であること有機的であることに由来するものと見ているがさらに根源的には、歴史的な日本人の特異な conditioning 或は trainedness に依存し、同時に風景観乃至は、空間知覚における心理的な preparedness (態度) にも拠るものとし、その意味において、これらの空間が直接経験を超えて形而上化されている。

したがってその意味においてそれを超越的空間であるとするのである。

補論は、著者の日本に関する基礎的一般的研究に関するものであり、その第1は、日本建築を西欧の住宅ならびに世界の現代建築との比較において論じ、第2は、日本に関する地理学的、歴史的資料の整理であり、日本の芸術論の特質をも加え、第3は日本住宅史の概観であり、何れも著者の主文の基礎をなし、

或は論旨を補強するところのものである。

論文審査の結果の要旨

日本建築に関する国際的関心は、一般的には3期にわけて考えることが出来る。第1期は、明治開国以来今世紀の30年代までの間であって、それは所謂民俗学的関心であってその代表者は E. S. Morse である。第2期は、それに次ぐ第二次大戦までの間で当時の現代建築家たちが新しい眼で古今東西の建築を見なおそうとした時に日本建築に一つの純粹様式の典型を見出した時期であってその代表者は B. Taut であった。

第二次大戦以降、一つには東洋の一小国にすぎなかった日本の名をその戦争によって知ったことと、もう一つには欧米の所謂現代建築が行きづまりを見せはじめたこととによって日本建築が、特にその空間的特性が、ひろく世界の建築家たちの注目をあつめ初めたのである。

これが即ち第3期であるが、多くの建築家や留学生たちが相次いで日本を訪れつつあるのである。そうしてこの期の日本建築研究の特徴は、この人たちの多くが体系的に歴史的にそれを研究しようとする態度にあると言えるのである。本論文の筆者もまたその一人である。さらに第3期のもう一つの特徴は、これまで日本建築のみならず、ひろく建築全般が様式的に、対象的に、美学的に見られ、研究されてきたのに対して、それが空間的に、現象的に、科学的に研究され始めた点にもある。Aligül Ayverdi 氏のこの論文も、そのような態度によって貫ぬかれている。それ故これらの点からも本論文が既往の日本建築研究書に見られぬ新鮮なアプローチと内容とをもっていることをまず指摘することができるのである。

以上のような立場に立つ本論文は、その基礎的研究を度外視しては成立しないであろう。それ故補論として提出された各部分はまず日本建築の歴史的展開を世界の現代建築との比較において記述し、それに対する寄与の可能性を探索し、それを肯定的に解釈し、特にその空間構成については現代建築の将来に一つの希望を与えるものであると考えるのである。次いで日本の地理学的資料と社会・文化的資料とを整理し、これらの中で日本における自然なる観念が西欧のそれと著るしく相異なる点を挙げ、それ故にまたこの自然に対する隔離としての建築も必然的に特異なものになるのであるとする。また風景なる観念についても同様でありしたがってまた風景に適合すると言う場合の西欧の方法との相異も挙げている。

さらに日本建築におけるスケール、寸法、比例についてその人間中心であることを述べ、そこに現代的意味を見出している。そうして補論の最後にこれらの諸特徴を総括して日本の芸術一般の創造性についてそのサイコフィジカルな特性を指摘する。

これらの主論文と補論からなる全体ははなはだ新鮮な内容をもち随所に S. Giedion, M. Ragon, J. O. Simmonds などを引用し、また F. L. Wright, Le Corbusier, M. V. Rohe の諸作品と対照して日本の伝統的建築の空間性・人間性・現代性をほとんど剩すところなく分析し、体系的に論述しているのである。それは単に、日本建築に関し西欧的、現代的、批評的方法によって研究された最初の論文である故のみでなく、現代建築批評における一つの方法をしめすものとしても貴重である。よって本論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認められる。